

自動移動装置など実験

街地が研究実験の対象候補地となっていることが二十九日、分かった。計画では、①中心街に住む住民主体の研究集会やアンケートを通じて、地域の魅力や生活課題を指標化②高齢者や障害者が安心して街を動き回れるような、ICT（情報通信技術）を駆使した小型電気自動車の自動運転の実証試験③などに取り組む。慶応大学などは今秋をめどに、青森市での研究推進体制を整える方向で準備作業を進めている。

慶応大学大学院特別研究教授に就任した中橋勇一氏（フロンテックネットワーク東北理事長によると、同プロジェクトは「コ（共同）・モビリティ（可動性）社会」を創出するのが目標だ

誰もが住みよい社会に

情報技術と先端移動装置などを組み合わせ、誰もが生き生きと暮らせる地域社会の創出を目指そうという慶応大学などの大型プロジェクトで、青森市中心街が工業、大日本印刷、エフ

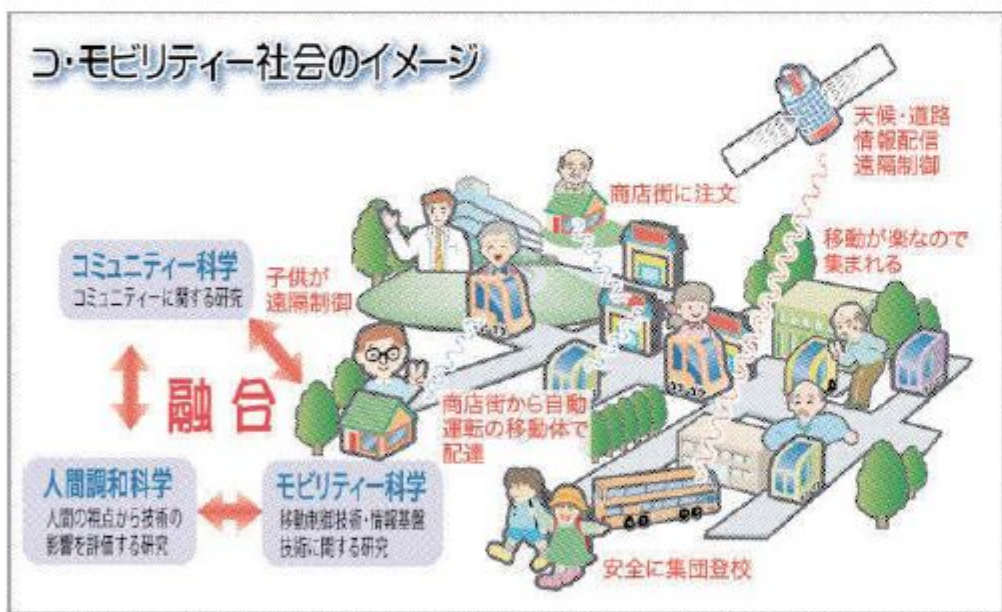
という。文部科学省の科学技術振興調整費による事業に採択。計画期間は、今年七月から十年間の予定。NEC、KDDI、沖電の各分野で研究を進める。このうち青森市では、同

エム東京などの企業も参画。「コミュニティー（共同）科学」「モビリティ科学」「人間調和科学」の各分野で研究を進める。このうち青森市では、同

市中心街地活性化協議会と共同でプロジェクトを実施する見通し。市街地の暮らしやすさや働きやすさ、商いのしやすさなどを数値的に指標化し、住民同士の

慶応大 青森市中心街で計画

つながりやを深めるための「まちなかマイケティン



(慶応大学のホームページを基に作成)

グ」に取り組む。その上で、暮らしやすさを向上させるための試みとして、ICTを活用し、小型電気自動車の実証試験を行う。例えば、足腰が弱ったマンション暮らしの高齢者が電気自動車であうが内の図書館に行き、市場で買い物をして帰る」という希望をかなえるための課題を整理する。青森市新町通りは、歩行者と自転車を分けた街路を持つ福祉対応型商店街であることや、障害者団体、市民団体の活動が活発であることから実験の対象地に浮上した。

中橋氏は「研究が順調に進めば、将来、全国初の近未来型コミュニティーが青森市に誕生する可能性がある」と話している。

※この記事は、東奥日報の許諾を得て掲載しております。無断転用・複写を禁じます。